

芥川だより

発行日***2016年10月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL072-681-8870



***** 一部100円です *****

柳原 (やなばら)



柳原は地名が示すように大昔は山間を流れる溪流の川岸にネコヤナギが生えていたのだろう。あるとき大雨が降って山が崩れ大きな土石流が谷を埋め尽くしたに違いない。いくつもの大きな石や砂地が土石流の凄さを物語っている。しかし、村人たちは苦勞して、その台地を田や畑に開拓した。谷の下流や両岸は小さな棚田にして中央を畑にした。水路が引けなかった時代には、米は貴重であった。だから苦勞してでも石垣を積んで田を作った。たとえ小さな棚田であってもかけがえのない田であったのだ。

柳原は村の東に飛び地のようにあった。2軒ばかりの家と田畑が山裾に広がり見晴らしのいい所だった。西の端にある我が家からは歩いて半時間ほどの距離である。少しばかりの田畑と山を持っていたので、よく手伝いに行った。谷水を引いた小さな棚田を、父が牛で鋤いて苗を植える。秋には稲刈りをして稲木に干し家まで運んで雑穀する。しかし、谷間であった為に日当たりが悪く、イノシシも荒らすので収穫は少なかった。

そんな柳原であったが、楽しい思い出もある。母は金が無くなってくると「柳原へ行って黄連採りをしようか」と私を誘った。手伝いで面白いのはマツタケ採りと染料になった黄連採りである。どちらも高値で売れたからである。子供心に何か買ってもらえそうで、いそいそと出かけたものだ。黄連は水はけのよい日影が生育によく、柳原の栗林は最高によい黄連が生えていた。石ころと土が混ざった地面に生えている黄連の太い根を選びながら採って乾燥し、軽く火であぶって黄金色の根だけにして売る。

今はもうマツタケ山も松くい虫にやられ荒れてしまった。黄連も採りに行かなくなった。柳原の風景もすっかり変わってしまった。こんなところに住みたいと小高い草地に立つたびに子供心に思った柳原もすっかり杉林に変容してしまった。2軒の家跡も木々の中に埋もれ、幾段にも積まれていた田の石垣も杉に覆われて崩れ、当時を偲ばせるものは何も残っていない。しかし、遠い幼い日々の記憶だけは、いまだ私の中にある。

死をめぐるあれやこれ(25)

老年彷徨

私の母の晩年は、認知症で寝たきりだったが、それなりに明るく日々を過ごしていた。問題は寝たきりになる前だった。ある日母が行方不明になっていると、実家のある岐阜のケアマネから京都の私のところに連絡があり、警察に届けを出した。しばらくして警察に保護されていると連絡があった。驚いたことにそれは母の里の尾張一宮にある交番だった。

さつそく私は新幹線とタクシーを乗り継いでその三条交番へ急いだ。母は愛用の押し車とともに、そこでケロッとした顔でイスに座っていた。母の頬は紅潮して十歳くらい若く見えた。警官とお世話になった方々にお礼をいい、家に連れてもどつた。母と何気ない話しをしながら、帰りのタクシーから見た木曾川の土手の光景が妙に印象に残っている。

母が里に向かったのは分かる。しかし二十キロほどもある距離を、どうも歩いたとしか考えられない。これが今でも謎なのだ。その翌日からだった、母がベッドで寝つく生活になったのは。



石川 吾郎

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
マスコミが伝えないニュースの側面	伊藤明	2
素老人☆よもだ帳	坂本一光	5
ドイツ哲学の旅Ⅲ	祖蔵哲	7
大峰奥駈道	梵店主	10
おつちよこチヨイぼけ	A O	11
父のシベリア俘虜記	若山哲郎	12
孫ウオッチング	福田圭	17
大人の今昔物語	石川吾郎	17
B級サラリーマン渡世譚	明石幸次郎	18
オクラの山たより	困り生	19
編集後記	嘉	20
女90年の軌跡	眞糺	21
俳句	土田裕 影山武司	22

みんなで知ろう日本の危機 (14)

伊藤 明

マスコミが伝えない

ニュースの側面

今回は、参議院議員の山本太郎氏が、先ごろ大阪駅前で行ったスピーチをご紹介することにします。このスピーチは情と理をともに尽くし、憲法について非常にわかりやすく解説して、安倍政権の政策がいかに国民の利益に反しており、その改憲の動きがいかに独裁社会への危険に向かうかを語る、優れたスピーチです。ぜひみなさんにお読みいただきたい

と思います。ただスピーチという性質上、問題を網羅しているわけではありません。特に安倍政権の改憲の動きで、「ナチスの手口に学んでいる」と思われる「緊急事態条項」については、本紙第一一一号、一一五号などの当記事を参照してください。以下、山本太郎氏のスピーチです。

憲法とは何か

今国会で、憲法を変えようという動きがあることを皆さんご存じですよ。法律は国民を縛るルールだが、権力者を縛るルールが「憲法」なのです。

どうして権力者・国家権力を縛らなければいけないの、と言えば、例えば王様みたいな権力者が誕生したとする。その権力者が「お前たち庶民には明日から消費税三〇パーセントだ、よろしくな」。国家権力が本気になってやろうと思えばこれくらいのはできるんです。それくらい恐ろしい権力だからこそ縛らなきゃいけない。王様のような権力をもつ者が「よし来月から徴兵制を導入する。十六才以上の男女ともに軍隊に行かせる。三年間。こんなことも権力者であるならできてしまう。そんな暴走を止めるために憲法があるんです。

権力者・国家権力、そういう者は憲法に書かれた範囲での権限しか行使できません。憲法に書かれている、与えられた力しか振るえないのです。でなかったら、好き放題やりますよね？だからこそ、「憲法が大事」なのです。

まず、この国の法体系について見てみま

すと、次のようになります。

《**本来の法体系**》(上位法から下位法へ)・・・**憲法、条約・協定、そして国内法**、という順序になります。

権力者を縛る法律が一番トップにあります。要はこの憲法に反するような国内法、つまり皆さんをしばる法律を作っちゃいけないよ、ということが決まっている。この憲法、非常に重要なことが他にたくさん書かれている。

日本国憲法九十八条・・・この憲法は、国の最高法規であつて、その条規に反する法律、命令、詔勅及び国務に関するその他の行為の全部又は一部は、その効力を有しない。

憲法が一番トップやからな、これに反するような法律は絶対に作るな、憲法に反するような政治的な行為はするな、何よりもこの憲法、絶対的なものだからな。もしそんな法律を作ったり、憲法に反するような命令を作ったり、憲法に反するような政治的行動を行った場合、それ無効です、ということが書かれている。すばらしいですね。権力者は、暴走しづらいですよね。

日本国憲法九十九条・・・天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官、その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負ふ。

権力者と言われるもの、総理大臣だけじゃない、大臣・国会議員も公務員も権力者です。その公務員たちは、この憲法を絶対的に尊重しなきゃいけない、擁護

しなきゃいけない、そういう義務を負っているんだ。絶対的な約束。

憲法とは何か？「市民の皆さんから国家(権力)に対して与える命令書」なんです。すばらしいです。国会は今暴走しているけれど、そして権力は暴走しているけれども、そこまで大きく、何か発言をしたら捕まるとか、というような状況にはまだ追いついていないのは、この憲法のおかげなんです。

「九十八条、九十九条、憲法に反するような法律、命令・行動は絶対にしちゃいけない。公務員、そればかりでなく権力をもつ者は憲法を絶対的に守らなきゃいけない、そう書かれている。

◆貧困と安倍政権の経済政策

今度は、生存権について、皆さんに考えて頂きたい。

日本国憲法二十五条・・・すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。

皆さん、健康で文化的・最低限度の暮らし・生活を送っていると、胸をはれる方はどれくらいいらっしゃいますか？多くは手が挙がらない。そりやそうですよ。大阪の最低賃金はいくら？時間八八三元。一ヶ月働いたとすると、月だいたい二十二日ですか、一日八時間、フルタイムで大きい十五万円台。家賃、光熱費、通信費、食費などいろいろ払わなきゃいけないものたくさんある。奨学金の返済も。いくら残る？貯金なんてできる？この国に生きる人々の三〇パーセントを超える

開を求める市民活動、青年法律家協会。情報公開は当たり前のことだ。世界の流れはそうなっている。どうして隠すんですか？黒塗りの資料なんてあり得ない。「情報を出しなさい」そう言う市民運動家たちをマークしているんだそうです。「青年法律家協会」正義感あふれる法律家たち。「全国公害患者の会連合会。核廃絶を訴える団体・原水禁・原水協」まで調査・監視されていた。「公害患者の会」、暴力的破壊活動に等しいような経済活動の果てに、被害者にされてしまった方々、その方々がどうして暴力的破壊行為なんですか？「都合の悪いことを言うな、企業にとって都合の悪いことを言うな。国にとって都合の悪いことを言うな」ということ、ですね。「核兵器廃絶を訴える団体」。暴力的破壊行為を行えるような核兵器を廃絶しようと言っているわけです。あまりにもあり得ないことですよ。

今この国で、政府(権力)に対して不都合な発言・真実を追求しようとする者たちは、すでにマークされ調査されている。

「公益」「公の秩序」なんかではない、自民党はちゃんと書け。「俺たちの利益、俺たちの秩序をかき乱す者たちには、表現の自由は認めない」だろう？

「公益・公の秩序」はそういう意味をもっている。非常に危険です。日本海を皆さんで向こう側、ミサイルかロケットかわからないけど、飛ばしてくる国、そこを笑っていられますか？一步一步近づいていますよ。

国が全体主義に傾くとき、**全体主義**

て何か？「あなたのために国があるんだ」「人々のために国があるんだ」という逆の形。「お前は国のために何ができるんだ」「国の役に立て」というような側に立った「全体主義」「独裁国家」。これを推し進めていくためには、**秘密主義がまかり通る。それだけでなく治安立法が次々に立ち上がっていく。**

テロ。オリンピックが来るでしょう。テロが起こったらどうします。**テロ関連法案**という名において、皆さん一人一人を縛っていくような法案、私がここ三年参議院議員になってからいくつも通っている。私一人で反対した法案もいくつかある。その時に何で言われるか知っていますか？テロ関連法案、テロの名の下に、法案を法律化するけれども、それは結局恣意的拡大、後で権力者が好きにしてみましたときに、皆さんにとって非常に危険な状況に陥る可能性がある法律に、私は反対をした。

「テロ関連法案」という冠がついている。これに反対した時に、決まって言われるのは、「テロ関連法案に反対する？お前テロリストだからだろ？」って。そのレッテルを貼られたくないから反対できないという空気が議員の中にあるんです。誰のために政治やっているのか、と真剣に思います。以上。

(注) スピーチの性質上、文章を補ったり、表現を多少変更した部分がありますのを、ご了承ください。

素老人☆よもだ帳 (31)

坂本一光

◆明らかに異形の国になり果てし遠き母なる日本を憎む

表題は、歌集『イギリス』(ながらみ書房、二〇一三年)に所収の短歌である。日本の歌人、渡辺幸一氏。

この国の異形は、近年、集中豪雨・暴風(台風・竜巻)・地震・津波などの自然災害と、政治の劣化が国民生活全般に及ぼす災い、いわば政治災害に顕著に見られるようになった。政治災害については、従来の日本の保守政治とは一線を画し、異質な危険をはらんで暴走するアベ政治の異形が際立つ。言うまでもなく政治災害は人災である。福島第一原発の過酷事故のように、自然災害と政治災害が複合して起きる人災の被害はより甚大なものとなる。さて、

この国の憲法を読みし夏の日の
心のままに戦争法反対

戦前に戻してならぬ時にいる
戦後生まれが正念場にいる

などと詠んでみても所詮蟪蛄の斧か。しかし、身の程知らずの無謀な試みであれ、異議申し立てを止めては六年前に「ひとり九条の会・大分」を始めた甲斐がない。

憲法を暮らしの中に生かそうと
「ひとり九条の会」を始めぬ

『憲法を暮らしの中に生かそう』は、高校全入運動が全国的に展開する先駆けとなった『十五の春を泣かせない』とともに、私が大学生当時の京都府知事・蜷川虎三氏の名言、彼の政治信条そのものであった。虎さんが今日直面する憲法の危機を予想したかどうか、十五の春だけでなく一歳の春も泣かせる国を想像したかどうか。茫とした懸念はあったかもしれないが、政治災害によるこれほどの社会の劣化は思いもよらなかったのではないかと。一九八一年彼が逝ってから今日までの三十五年の歳月は、このまま行けば、戦後のわが国がかつて経験したことがないほどの政治災害をもたらすに違いないアベ政治を生み出した歳月でもあった。失われた三十五年、前号にも述べたとおり、

生きて行く基本に政治があることを
うかうか忘れ来しことを恥ず

しかし何をしていったのかと恥じてばかりいるわけにはいかない。京都清水寺に登る石段の右手、茶屋傍に立つ碑に言う。

道はただ一つその道をゆく春(虎三)

さて、この一月ほどの間にもアベ政治はそのがさつで荒つぽい本領を次々と発揮していた。

同盟の絆に司法かしらー、みぎつ！

辺野古埋め立てによる米軍新基地建設が普天間基地の危険除去のための唯一の解決策である、これが国の一貫した主張

であるが、遂に司法が国のこの主張をほぼ丸ごと認めた（九月十六日。なお普天間基地は、戦後米軍がどさくさまぎれに奪い取って造った基地）。辺野古の米軍基地建設を巡り、翁長沖繩県知事は、公約及びそれを支持する民意に従って、前知事の埋め立て承認を取り消していた。その撤回を求めた国の是正指示に知事が従わないのは違法だとして、以前の裁判で合意した和解に基づき国と県との協議が進行している最中にもかかわらず、司法決着を急ぐ国が県を訴えた訴訟で、福岡高裁那覇支部（多見谷寿郎裁判長）が国の主張を認める判決を下したのである。その際、判決が確定すれば従いますね、従いますね、と裁判長は知事に念を押したという。県の敗訴が確定すれば、「埋め立て承認取り消し」の知事決定は撤回するほかないだけのこと。判決に従う、その限りについてそれはあたりまえではないか。従いますねとは、裁判長たるものの言とも思えない。沖繩県は最高裁に上告。要するに世に言う「司法の限界」か、私などはこういう裁判こそ裁判員裁判にしたらいと思う。そのわけは、判決内容の詳細に立ち入ることは省くが、この種の裁判での司法業界の論理は、普通の人間の生活に根ざした感覚と論理から大きくかけ離れていて、よく見聞きし学び、知恵ある深い人の考え方からは遠い論理だと思ふからである。「医師は知識ある人より深い人がいい」、韓ドラ『チャングムの誓い』で女医をめざして修行中の主人公チャングムに指導医師が言い聞かせる

感動的なセリフである。今回、私は、裁判官は微に入り細にわたって屁理屈をこねる現実的能力より、たとえ空想的であっても物事の本質を見極め驚つかみする能力のある人がいい、とあらためて思った。政府の感覚と論理も異常。新基地は絶対には造らせないという知事の決意と対照的に、鶴保沖繩・北方担当相は記者会見で「注文はたった一つ。早く片付けてほしいということにつきる」と笑いながら言うてのけた。

沖繩を巡る問題はそれにとどまらない。沖繩県東村高江の米軍ヘリパッド（オスプレイ着陸帯）建設工事に、政府は九月十三日、陸上自衛隊の輸送ヘリ二機を投入した。自衛隊を米軍施設建設の下請けに出すという、従属国丸出しの暴挙である。みんな差し上げますアメリカに、か。

県民を嘲笑うごと重機吊り
自衛隊ヘリやんばるの森へ

ふり返れば、何度も何度も繰り返されてきた悲劇がまた繰り返されていた。沖繩の屈辱の日四月二十八日、沖繩で若い女性が殺害され元米海兵隊員が逮捕された。

アメリカと同盟しなければない悲劇
悲劇と思わぬ日本を憎む

同盟の絆は絆しと沖繩の
悲劇は告げる命の枷だと

安倍首相は、日米軍事同盟は希望の同盟だと胸を張る。それにしても再発防止策の一つがパトロールの実施だ、とは。

パトロールすれば希望が生まれるか

パトロールを名目に全国から機動隊員や民間警備員が集められた。川柳で笑い飛ばすどころのことではなかった。それがヘリパッド建設の強行のためであったことはやがて、七月十日の参議院選挙翌日（翌日である！）、県道を封鎖して反対住民や全国から駆けつけた支援者たちを暴力的に排除し、建設資材搬入を強行したことに現われていた。

沖繩は怒りを水に流さない

フクシマと辺野古つないで水怒る

水怒る国の大臣二人落ち

大臣が落ちた途端に島にムチ

その二月後の自衛隊ヘリ動員であった。

安倍首相の暴走は、九月二十六日衆議院本会議における所信表明演説で一つの極限に達したように見える。安倍政権は先の参議院選挙を含めてここ数年の国政選挙のたびに、経済第一、アベノミクス第一を掲げ、争点隠しの選挙を続けてきた。

人はパンのみにて生きるにあらずるに

まだ道半ば実が熟すのを待て

そして選挙で多数を得ると、国民の信任を得たとばかりに秘密保護法、集団的自衛権行使容認の閣議決定、安全保障関連法（戦争法）などを強行、憲法と民主主義から暮らしの隅々までを破壊する政治災害を撒き散らしてきた。その姿勢は今回の所信表明においても変わらない。曰く、「この道を、力強く、前へ」。これが、選挙で示された国民の意思だ、「安定的な政治基盤の上に、しっかりと結果を出す」。改憲に踏み込む姿勢を見せる一方で、戦争法強行後一年が経過し、南スーダンPKOに派兵される自衛隊に新たに付与される任務（「駆けつけ警護」「宿営地共同防護」など）の訓練を開始しながら、戦争法には一切言及しなかった。凍土壁などの汚染水対策問題一つとつても収束のめども立たない福島第一原発事故、鹿児島県知事が川内原発の運転中止を申し入れた再稼働問題、一兆円を超える税金を食いつぶし原子力規制委員会から見え見放された高速増殖炉「もんじゅ」（「ふげん」もそうであるが罰あたりな命名をしたものだ）の廃炉も検討せざるを得なくなつた核燃料サイクル破たん問題などにも言及なし。また株価つり上げのため年金積立金の株式運用を拡大し二〇一五および二〇一六年度で十兆円もの巨額損失を出した責任についても触れず。しかしアベノミクスを一層加速し、デフレからの脱出速度を最大限まで引き上げるとした、「事業規模二十八兆円を超える

経済対策」は高らかに誇ってみせた。

ものは言いよう、首相ならそれが通るのだろうか。アベノミクス一つとっても、

道半ばアベノミクスの大花火

朝に道問えば夕べにまだ半ば

失敗も基準変えれば道半ば

選挙中まるで手柄話を聞かせられているような気がしたのは私だけではなかったらう。所信表明演説は、介護、社会保障、TPP等々について、選挙では何も語らずに於いての信任ぶったくり宣言が続いた。

安倍首相の、そして自民党国会議員たちの、幼児じみた―幼子に罪はない―大はしやぎはその中で起きた。かつて自らをどう思いこんだか「立法府の長」と言い（行政府の長でしょ）、自衛隊を「わが軍」と言い（実力部隊です）、さらには自衛隊の戦闘機や米軍艦に嬉々として乗り込んだ演技派の宰相ならさもありません、と決して見過ごせない光景が国会議場に繰り広げられた。安倍首相は言った。「現場では、夜を徹して、そして、今この瞬間も、海上保安庁、警察、自衛隊の諸君が、任務に当たっています。極度の緊張感に耐えながら、強い責任感と誇りを持って、任務を全うする。その彼らに対し、今この場所から、心からの敬意を表そうではありませんか」これに対し多くの自民党議員たちが申し合わせていたかのようになり立ち上がって拍手、首相も壇上で拍

手し演説を中断、大島議長が着席を促す事態になった。

この問題について翌日の衆院議院運営委員会理事会は「首相の行為は不適切」との認識で与野党が一致、自民党理事は「政府に対して、気をつけてほしいと伝えたい」と表明した。三十日には衆院予算委員会で民進党の細野氏が質問。「この国の国会ではないのではないかと錯覚すら覚えた」と述べたことに対し、首相は「どの国だと言うのか。あまりに侮辱ではないか」と答えた。「どうしてそんなに問題になるのか理解できない」とも。

木で鼻をくくりとぼけるアベ首相

この問題の異様さは、行政府の長が立法府の全議員たちに議場で号令を発し、それに一部の議員たちが何の疑念も持たずに議場で賛同した点にあるだろう。安倍氏は自民党の総裁である、立ち上がり拍手したのも自民党議員だけである、ではすまされない。党内での出来事なら問題にならないだろうが、党内と議場とを一緒くたにして恥じない異様さは、政治的独裁者とその信奉者だけが持つ感覚であろう。何が問題か理解できないとわが首相は言った。政治の劣化、政治の退廃はここまで来た。政治災害を引き起こす病根は深いと言わざるを得ないだろう。

よもだも大概にせい！素老人はこの日、一日中不機嫌であった。

（かたちは心であり、心はかたちになる ■ 大分の素老人）

哲学屋のつづき (27)

祖蔵 哲

ドイツ哲学の旅 Ⅲ 哲学の旅編

このコラムの『ドイツ哲学の旅』は七月七日に日本を出発して最初の六日間は前々号にドイツ各都市観光旅行を「パック旅行編」として、前号には七月十八日までの六日間、フランクフルトからケルン、ライプチヒのいわば「音楽の旅」「鉄道の旅編」として書きました。さていよいよ、この旅の本来のテーマであるドイツ哲学を訪ねる旅が開始になります。

近代哲学は十二世紀の長い中世キリスト教スコラ哲学を経て、十五世紀のルネサンス、十六世紀の宗教改革の時代を越えて十七世紀のイギリス経験論、大陸合理論から始まる。時代背景にはイギリスの名誉革命、ニュートン物理学の確立など市民意識や自然観の変化がある。この流れは十八世紀半ばの産業革命に行き着き、まさしく近代が開始するのであるが、ドイツはこの流れに乗り遅れる。それはもともとドイツは神聖ローマ帝国であり、教皇の権力が強く領邦国家に国が分裂していたことと、宗教改革の余波である三十年戦争などで国道が荒廃したことが大きく影響したと考えられています。それが原因となり哲学では特異な変化が起こります。ドイツ観念論という哲学の誕生です。

このコラムの愛読者はもうご存知かと

おもいますが、哲学のおさらいです。古代ギリシャ哲学はアリストテレスを元として自然はある目的をもって動いていると解釈しました。中世のキリスト教はこれを神の計らいとしてスコラ哲学に継承しました。しかし、十三世紀のイギリス、オックスフォード学派はスコラ哲学を批判し、ロジャー・ベーコンは経験を重視する数学や実験による自然哲学をすすめました。その後スコラ哲学内では唯名論などの不毛な普遍論争がおこりその崩壊が始まったのです。人間中心主義への転換ですね。やがて、フランスではデカルトが有名な「我思う故に我あり」という大陸合理論を提唱しました。これは、さらに人間中心主義をすすめ、「私」という絶対的主体がそれから離れて世界である「物」を認識しているといいました。「主体」と「客体」の分離の開始です。この哲学的意味がいまひとつ分りにくいのですが、我々近代から出発する現代人にとって大変重要なので理解に努めましょう。

近代以前の「世界」は人間の身体を含む全ての自然を「一体」と考え「魂」や「精神」である「私」も「もの」として一体でした。魂は森の木々に宿り、精霊が私に入り込んでなんの不思議もなかった、自然と精神は溶け合った融合の世界でした。しかし、このデカルトの「合理論」はこれを否定し「精神」と「物」を分離したのです。全てを疑っても、そう考えている私は自体は疑えない。本当

に確かなものは「考えるだけ私」である。と。それまで、悪魔が人に乗り移ったとか、神の怒りが自然災害を起こしているといった迷信や悪習慣が掃き払われました。さらに精神としての「私」は神の位置から物事を見るのが許されることになりました。「客観的に考える」とは「考えている自分」と「考えの対象」の言わば上に立つて考えることなのです。自分自身をも「物」として見るこの「神の視点」の獲得こそ近代の始まりと言えます。イギリス経験論は帰納法、大陸合理論は演繹法に対比されますが、これは方法論の分類であって本質的には先に述べたルネサンス以来の人間中心思想への転換の哲学的仕上げとも言えるものでしょう。この「精神」と「物」を分離する二元的思考は科学を進展させ、一見我々の生活は向上し、進化したように思われますが、獲得したものも多量に代わり失ったものも少なくありません。「物」の世界がどんどん拡大し我々の精神は消えてゆく運命にあります。このような状況にあり近代哲学のなかの危険性をいち早く示したのがドイツの近代哲学です。それにはドイツの特異な位置が関係します。

さて、後進国ドイツにあって近代哲学の最初の哲学者はカントです。カントもこのコラムでは何度でも登場している。で愛読者によくご存知でしょう。難解な哲学者の一人として有名ですが、すでにその代表著書「純粹理性批判」と「永久平和のために」はここでも紹介しました。もう一度おさらいしますと、カントはイギリス経験論と大陸合理論を統合したのです。どのようにしたかという点、それ以前は人間が物を知ること、物という対象が人間という認識に一致することと考えられていた。つまり、このリンゴが「赤く」「丸く」見えるのは、リンゴの方から「赤い」色や「丸い」形を与えられて「経験」や「洞察」がこのリンゴを知るのだと。しかし、これだと「経験」や「洞察」がない人間は全く物が認識出来ないということになる。カントは有名な「コペルニクスの転換」で、人間の認識が対象に従うのではなく、「対象が人間の認識に従う」と発想の転換を行った。つまり、リンゴが「赤く」「丸い」のは人間の認識装置が「空間」と「時間」のフィルターを通して判断しているとしたのだ。こうしたカントの思想の背景には、ニュートン物理学の影響が見えます。元はと言えば、大陸合理論のデカルトも数学者であり、科学と哲学のせめぎ合いが開始された時期であったのかもしれない。

さて、手短かに近代哲学の始まりを復習したわけですが、この近代ドイツ哲学はカント以後、ドイツ観念論と呼ばれます。この場合、カント自身はドイツ観念論哲学には含まれません。どうしてかという点、カントはコペルニクス転換によって人間の認識に物が従うとしたため、本来の対象である「物そのもの」は人間が決して直接知られないとしたからです。そしてそれは「神」の領域であって人間の領域ではないと分離したのです。いわば世界を「知られるもの」と「知られないもの」の二つに分けたわけですが。しかし、カント以後のドイツの哲学者は再びこれを「一つ」のものにするために思索をはじめました。この「一つ」の理想を目指す哲学という意味から「観念論」(理想主義)と呼ばれるようになります。「観念論」の「観念」は「考えるだけ」という意味ではありません。このドイツ観念論哲学はフイヒテ、シェリングを経てヘーゲルで完成させられます。

おっとと、ドイツ旅行記がいくら本号から哲学編にはいつてとしても、哲学講義になつていきません。せつかく、旅日記で読者が増えたのにまた小難しい話に返り減ってしまうかもしれません。旅行記に話を戻しましょう。

ということで、いよいよドイツ哲学者を訪ねる旅がはじまるのですが、先ほどの小難しい話にもありました、なんといつてもドイツ哲学という代表はカント先生です。そこでどうしても訪ねたいのがカントの生誕地でした。カントは一七二四年プロイセン王国ケーニヒベルグの生れ、一八〇四年七十九歳で亡くなるまで生涯ずっと同じところで哲学した厳格な人として有名ですが、しかし、そのケーニヒベルクは現在ドイツ領ではありません。現在はロシアのカーリングラントになっています。そもそもその地はドイツ騎士団の領地であり現在のポーランドの北、バルト海に面する飛び地でした。ドイツ騎士団というのは十字軍聖地回復時代、巡礼者を警護したキリスト教修道会。その功績で教皇から賜った土地なのです。ロシアまでは遠すぎる、残念ですが諦めるしかありません。そこで次にドイツを代表する哲学者ヘーゲルの生誕地を訪ねることにしました。また、ここでまた、小難しい哲学の話になりますがお許しください。ヘーゲルは先ほど少し触れましたがドイツ観念論を完成させた哲学者です。ヘーゲルは弁証法とも知られていますね。そもそも弁証法とは古代ギリシャ哲学からはじまります。ソクラテスは対話問答により、自分は知らないこと知っている、すなわち「無知の知」ということを導きます。この対話が弁証法の故郷です。ヘーゲルの弁証法は、俗に「正-反-合」や「止揚」と言われるように相対する矛盾が高次レベルで統合される、この繰り返しによって歴史は進むとした、「精神」の歴史的弁証法なのです。その意味では、先ほどお話しした近代哲学が二元論で分離した「精神」と「物」を再び一つにしようとする試みたのかもしれない。マルクスがこれを唯物論的弁証法として下部構造である経済が歴史発展を決定づけると応用したこともよく知られていますね。

前置きがえらく長くなりましたが、そのヘーゲルの生誕地シュトゥットガルトへ行きます。七月十八日、四日間も滞し、すっかり馴染みになったライプツィヒ

駅を私たちは朝早く、ICEに乗って離れた。目的地は再びドイツを反時計回りに西へフランクフルトまで引き返し、そこを經由し南下する全約五時間の列車の旅の先にある。まだ、朝が早いいため通勤客が多い、我々の旅行者は周りの空気には溶け込めないが、すっかり乗車には慣れてきた。都市を離れるにつれ田舎に入ると田園風景や古い中世のレンガの建物がぼつぼつと見えてくる。時折通過する駅名を読むと結構、知っている地名が多い。パツハの生まれ故郷、アイゼナハも通過した。地図を見ていないため、予告なく駅を過ぎるので慌てる。ああ、降りてゆつくり散策してみたいなという誘惑にかられる。何故か日本人にとってドイツは馴染みが多いみたいだ。例によって昼食はホテル調達ランチで車内にてすませると十三時、目的地に到着した。

シュトゥットガルトはベンツやポルシェといったドイツを代表する会社があり工業都市です。しかし、街並みは中世風の建物が多く、他の都市と同じように大戦後の復興に力をいれている感じが感じられる。早速、タクシーに乗りヘーゲルの生まれた家を目指す。ところでそこは「ヘーゲルハウス」と呼ばれているのだが、日本のグーグルで検索すると、なぜか勝手に旭化成の「ヘーベルハウス」に変換されてしまう。どちらが世界的に有名なのか。余計な御世話だ。さて、タクシーを降りてその家の前を見ると、何か書き物があり扉が閉まっている。おー、

休館日か、アウト。よくあることだ、せっかくならばる日本からきても休みはどうしようもない。人によってはどうしても行程が合わないときはメールでお願いをしておく、好意でわざわざ開けてもらえる場合もあるとか。そんなこともしていないので諦めかけていると、どうも書いてあることは昼休みとかですぐに戻るとか。一安心。そこで昼食ものたりなかつたのでハウスの前のホットドッグ店で待機することに。しばらくすると係員らしき人が扉の鍵を開けているのが店から見えたので勘定を払い、ハウスへ戻った。お待たせとは言っていないませんが、どこに行っていたかもわからない係員にチケットを買うべく、いくらですか、と尋ねる。すると、なんとフリーだと言う。ドイツでも様々の記念館を巡ったが無料のところはなかつた。なんであれ只であれば結構なことなので理由は聞かなかつた。しかし、展示を見て後から推測はできた。ともあれ、わたしたちにはドイツで二番目に偉大な哲学者ヘーゲルである、じつくりと展示を見よう。

建物はヘーゲルが生まれた当時のものではなく改造はしているらしいが、三階建てでしっかりとしている。まず年表があった。一七七〇年生まれ。同年には、かのベートーベン、そして同郷の詩人のヘルダーリンもいます。展示物はヘーゲルの著作物や着ていた服、有名な帽子や絵画など多数ありました。最後の方の展示物には世界で翻訳されたヘーゲルの著作

本もありました。その中で目についたのは中国語の本の多さです。その時、ハツと気がつきました。入館料が無料の理由が。先程紹介したようにヘーゲルは弁証法で有名ですね、もちろん観念論的弁証法ですが。しかし、それはマルクスの思想に大きな影響を与えたことは、皆さんもご存知ですね。マルクスは物論的弁証法と史的唯物論で科学的社会主義の理論を確立しました。中華人民共和国にとってはまさしく、歴史的恩人、なのです。ひとり、納得しながら充実した見学をおわり階下に降り、本当の理由は係員に聞かずお礼だけを言つて外に出ました。世界中の人もヘーゲルのそのような功績は忘れつつあり、また、良くないイメージとなりつつあります。本当の理由はやはり聞かない方が良かったのだと今も思っています。

さてもう十五時すぎ、今夜のホテルはまだ少し南のチュービンゲン。少し急ぎましょう。駅にもどり今度はローカル電車に乗ります。日本ではもう考えられませんが、ドイツの各駅停車は冷房がありません。いくらここらは北海道よりも北にあるからといっても夏は暑い。窓を開けても暑い。夏休みなのか、小学生の団体が乗り込んできました。丁度、我々のグループのひとりが日本の団扇をもっていたので、この話で盛り上がりました。ウチワ、ウチワと皆、日本語の練習。たまたま話した引率の先生の息子が会社の務めで今、日本に滞在しているのだとか、世界も広いようで狭いですね。引率は

学生らもいて夏のキャンプに行くのだとか。しかし、小学生とはいえ彼らの成長度は大したもの。女の子のショートパンツ姿などには目の置き場がありません。成長は早いけれど、それにつれて欧米人の歳をとるのが早いこと。三十歳を過ぎれば老婆かなと思うくらい。ピークは短いほど美しい。そんな妄想をしているうちに暑いローカル電車は一時間でチュービンゲンに到着しました。

チュービンゲンは日本ではあまり馴染みがない町ですが、真ん中にネッカー川が流れる美しい大学町。このチュービンゲン大学は特にドイツにおけるルター派神学の中心。若きヘーゲルはここで友人ヘルダーリンやシェリングとともに学びました。しかし、その後三人は思想上の違いによりバラバラになり、特にヘルダーリンは心を病み、この町の塔に幽閉されました。その後、ヘーゲルはドイツ中部のイエーナに移ります。ちょうどその頃、フランス革命後のナポレオンがドイツに侵略。ナポレオンを封建体制解体の英雄と熱狂したヘーゲルは、イエーナに入城し、それを間近で見たヘーゲルは「世界精神が馬に乗って通る」と表現しています。かのベートーヴェンもナポレオンにちなみ英雄交響曲を作曲しました。その後、ナポレオンは独裁体制をひくことになり、だんだんと二人の熱もさめていったことも同じですね。

そんな歴史のある町、チュービンゲン駅を降りて、少し歩くとネッカー川にかかった橋がありました。綺麗な花が兩岸

大峯奥駆道(5)

梵店主

筋肉が壊され脂肪と骨と皮になると、えらいことになる。まず、足の裏の筋肉が消え脂肪の水袋みたいなのが足裏に出来る。歩くとゴム毬を踏むような感じがする。廊下を歩くと足裏の骨と敷板が触れてコンコンと音がするような具合だ。ふわふわとした不安定な平衡感覚なくなってしまった。

よっちゃんは、六甲全山縦走を来年に完走する目標を立てたが、はたして出来るか非常に不安だったが、とにかく歩くことにした。家のそばにある遊歩道を毎日歩いて様子を見ることにした。遊歩道は猪名川と藻川が中州になった園田の地域を取り囲むように造られた堤防で一周が一〇キロである。よっちゃんの家は、堤防の北側にある浄水場の近くのマンシヨンの六階で、伊丹市と豊中市と尼崎市のちょうど境目である。

周りの人は自分の住んでいるところを園田という。けっして尼崎とは言わない。武庫之荘や塚口の人も同じように言うらしい。どうも尼崎という地名は印象がよくないらしい。

よっちゃんは、田舎から出てきて園田に住みだして二十五年であるが、いっこのに街に愛着が持てなかった。何か場違いなところにいるよそ者感覚がぬけなかつたのである。

早朝に起きだして静かに身支度してドアを開けエレベーターに乗って下り、玄関口をでるとすぐに藻川の脇に造られた遊歩道に通じている。非常に便利で自然環境のよいところであったが、よっちゃんは今までは歩くことがなかったので気づかなかつた。灯台元暗しというやつである。自分がいかに恵まれた環境にいたのかわからなかつた。家族や友人たちも同様である。病気をしたおかげで知ったのである。

早朝の遊歩道は、人けがないように思っていたが数人の人が歩いていて、薄暗くてよくは見えないが、いろんな人とすれ違ったり、走って追い抜いていく人もいた。よっちゃんは、自分一人かと思っていたが、自分と同じように運動しようとしていた人が多くいることを知った。仕事を終えて帰って夕食をすませてすぐに遊歩道を歩く。早朝とは違った人たちが歩いたり走ったりしていた。よっちゃんのように朝晩歩いている人は見かけなかつた。

歩く距離は少しずつのばして最終的には片道三・五キロを往復する七キロにした。これを朝晩歩くのである。一時間十五分ぐらいで歩く。

はじめは二キロぐらいをゆっくり歩いていたが、日数を重ねると少しずつ長く歩けるようになった。毎日歩き始めると生活が変わってくる。晩酌していたビールや酒を飲まなくなつた。朝早く起きる

から早く寝る。歩いて体が疲れるのですぐに寝られるようになった。テレビも見なくなつた。新聞も見ないし本も読まなくなった。ただ歩くことだけを考えて暮らし始めた。また体重計の針を気にしだすと自然と食べ物減らすようになる。

しかし、物事はそう簡単には進まない。身体の節々が痛くなる。筋肉痛がおさまらない。病気の体が訴えてくる、もつと軽い運動をしようと。あんまり頑張ると病気がもつと悪くなるんじゃないのと家内も心配する。私の心は揺れる。今日は止めとこか、休養日も大事だし。などといったいつい弱音を吐くのである。

怠惰なところは、いつも怠けられる口実をさがす。身体の膝や腰が痛い、医者が無理するなど言っているから。天気がわるい、など。いくらでも言い訳できる。そんなことをいちいちあげたらきりが無い。このまま何もせず黙って座っていたら、よっちゃんの身体は歩けなくなつて車いすか、寝たきりになるしかない。よっちゃんは、一か八か、とにかく歩いて身体を少しでも鍛え、筋肉をつけ人並みに生活するために言い訳をすべて捨ててただ歩くことにした。

嫌になつたり、苦しいと思つた時には、尊敬する戸田巽さんを思い起こし、自分を叱咤することにした。戸田さんのように八十八歳で大阪・天保山から富士山まで歩く位の根性を少しでも持ちたい。これぐらいの事で負けてはいられない。

に咲き乱れ、その橋を越えて町の坂を登ると大学が見えてきます。前には居酒屋などがあり、その昔、ヘーゲルなどもここで飲みながら哲学談義を交わしていたのかとノスタルジックな気分になりました。今夜の宿は橋のもとにありチェックインした早速、夕食へ。丁度、向かいの橋の向かいにオーブンな居酒屋が。ネッカー川を見下ろしながら飲むビールは格別です。川にはドイツ流屋形船も行き来しています。酔いも程よくなつたころ、何やら調子のよい音楽が流れてきました。店の隣の広場で地元のブラバンドが民族衣装のユニホームでドンチャンやっています。我々もそちらへ移動。前席へ行って鑑賞。ブラバンドのメンバーは年齢層様々。けどドイツ的なのは、おっさんは必ず譜面台の下にはビール。日本ではそこまでは。そんなこんなでチュービンゲンの楽しい夜は更けていきました。

今回の旅行記ははじめて哲学編としてスタートしましたが、前置きの哲学談義が長くなり七月十八日、一日だけの旅行ルポとなりました。もつとドイツの町を知りたいと期待していた人にはゴメンなさい。旅行記といつても哲学となるとやはり時代背景や思想の知識が必要なのではないでしょうか。比重が大きくなります。次回もつと難しくなり、ドイツ哲学というより二〇世紀最大の哲学者といわれているハイデガーの故郷を訪ねます。ご負担をおかけします。

あっぱれ!フミちゃん…の巻

私の友だちには「どこかしら変」という共通項がある。類は友を呼ぶのだか何だか知らないが、「本当に立派だ、まっとうだ」と思うような人は一人もいなくて、「まさか、そんな…」と呆れるような人間ばかり。だから、楽しいんじゃないか、と言われればそうなんだけど。

そんな友だちのなかでも、フミちゃんは突出している。胆嚢と肝臓の間に腫瘍ができ、入院したのは九月の二十日だった。手術は翌々日。もちろん、事前の検査は入院の前から何度も行われ、そのたびに深刻な事態を告げられ、ご主人も近い友だちも真つ青になった。

フミちゃんは十年ほど前に、乳ガンで片方の乳房を全摘している。リンパ節への転移もあって、治療は長引き、フミちゃんとは仕事仲間でもある、我が親友F子によると、「フミちゃん、まだ薬飲んでるって。同じ乳ガンでも、私の場合とはえらい違いやわ」と言っていた。ガンはその進行度によって、ステージという言葉で示されるようだが、今春、手術したばかりのF子は1期ですらない0期だった(それで手術をするのか?と思うが、私はF子のお姉さんと一緒に、切除直後の肉片を見ている)。

そのステージが「4」の可能性があると、医者に告知されたフミちゃん。「胆嚢と肝臓は体の中心部にあるから、乳ガンのようなわけにはいきませんよ、相当、大変な手術になると思っておいて下さい」と言われたそう。

そんな厳しい状況での検査の間も、フミちゃんはふだん通り仕事をし、趣味で打ち込んでいるバレーボールも続けていた。

「検査って、結構、フラフラになるんですよ。待ち時間もあつたし、検査室が地下やったら、そこまで降りて行かなあかんし」とF子。実は、F子とフミちゃんは同じ病院で、たまたま検査日が重なった場合、別々のフロアではあるが、一緒に検査を受けていた。病院内で携帯電話で連絡を取りあい、待ち時間にコーヒーを飲むなどして、フミちゃんはF子に「アంతと一緒に嬉しいわあ」と喜んでいたら。

「フミちゃんって、タフやでえ」と

F子は目を丸くしていた。「病院まで自転車で行ってるねん。地下鉄で乗り換えをしてるより早いやろって。大阪市内のことなので自転車でも片道三〇分ぐらいの距離だと思つて、それにしても、お腹に大きな病気を抱えて、自転車はないだろう。さすがに、病院の先生に「ご家族と来て下さい」と言われたときは、旦那さんと一緒にタクシード行つたそうだが。

F子と検査日が重なったとき、フミち

やんの方は手術前で、かなり時間も、体への負担もかかる検査だったらしいが、「帰り道に、むちゃくちゃお洒落な食料品の店、見つけてン。行こ、行こ!」と誘い、「イタリアのケチャップとかいろいろ買い込んでいた」という。自転車ならではの芸当だ。

買物をしながら、フミちゃんは「いややでえ」と旦那さんのことをクソミソに言っていた、とF子。「フミちゃんが用意せえへんかったら、旦那さん、何も食べへんねんテ。冷蔵庫に何か入ってるから、適当にみつくろつて食べたらいいのに、それもせえへんねんテ」。たとえば、サンドイッチ。ふだんはフミちゃんを作るのだが、その材料が全部、冷蔵庫に入つていても「面倒くさい」とお腹をすかせたままにいる。住まいや仕事場のすぐ近所にお店はいくらでもあるのに、自分で食べに行くことも、買いに行くこともしない。そんな面倒なことをするぐらいなら、お腹をすかせていた方がいい、というタイプなんだとか。ある意味、うらやましいような食欲だが、フミちゃんは「どうすんのん、私が入院してる間、飢え死にするんかいな!」と怒っていたそう。

その入院の日。バレーボール仲間のオーサキ(女ターザンの異名をもつ、デカくて美人で型破りな女!)が、ビールを持って見舞いに来て、ほぼ一日、病院にいたそう。ビールはさすがに…とたじろぐフミちゃんにオーサキは「私だつ

て、それぐらいの常識はわきまえてます」と自分用のビールとは別に、フミちゃん用のノンアルコールビールを差し出した。「う、うう」と言葉に詰まったフミちゃんにオーサキは「ジュースと一緒にやろ。どうせ、明日から飲まれへんねんから、今日、飲んどき」と言い、フミちゃんもそれもそうだと、「ノンアルコールビールはやっぱりおいしくない」と思いながら、それでもおいしく(楽しく、か?)飲んだ。手術の二日前、胆嚢だけでなく、腫瘍が広がっていたら肝臓も一部、切除する、術後は相当な痛みがあると覚悟しておいてほしい、と医者に言われている重篤患者が、である。

手術が無事終わったことを確認したくて、三日後にF子が仕事先に電話すると、旦那さんは声を落として「ウン、かなり痛がつてる。相当、苦しそうや」と口数が少なく、それを聞いてF子も落ち込み、私も「三日も苦しい状態って…。いまだき、痛みはコントロールできるん違うんかいな」と暗澹とした気持ちでいた。

それから四日後である、フミちゃんが急に退院したのは。実は、ネガティブ思考な私は「開腹したが、手を付けられず閉じた」というケースかと一瞬疑ったのだが、「胆嚢は取ったけど、腫瘍が悪性ではなくて、肝臓は何の問題もなかった!ま、盲腸と一緒にやな」だって。なんだよ、なんだよ、よかつたじゃないか!と不覚にも涙がこぼれそうになったが、フミち

やんは「あの医者に、えらい脅かされたわ。アハハハ」って。まったく！

一週間の入院ですんだとはいえ、開腹手術である。二〇センチにわたって、ホツチキス(?)で止めた痕があり、

昨今、抜糸は必要ないらしいが、そんなお腹でフミちゃんは、いつものバレーボールの練習に参加。さすがに、軽くボールに触れるぐらいにしておいたらしいが、練習後、オーサキらと退院祝いの酒を飲み(退院から三日目!)、この週末に、今度試合に出る、と言っていた。「ホツチキスはげないか」と小心者の私はハラハラだが、出血騒ぎもなく試合は無事に終わったようだ。それにしても、あっぱれ!フミちゃん。無茶だけど、私にはアスタがすぐく立派に思える。(AO)



父のシベリア俘虜記

「流転八十年」(6)

若山 哲郎

「俘虜」と「捕虜」との違いはなんだろうか。そんな疑問が湧いてきた。今はインターネット時代だから何でもここで調べられる。そう思って検索してみたが納得のある回答はなかった。同じ意味だとか、日本軍は「生きて虜囚(りよしゅう)の辱を受けず」という戦陣訓などで捕虜になるのを禁止していたため別名で呼ばれたというのくらいである。もう少し詳しいことを知りたくて図書館で調べると、「捕虜」とは戦闘中に捕らえられた軍人のことを言い、「俘虜」は停戦後に投降した軍人のことを言うらしい。その明確な違いは「捕虜」は国際法であるジュネーブ条約により保護されるということである。労役禁止は無論、食事も敵軍と同じ待遇でなければならぬと決められている。この条約の目的は捕虜を保護することによって、敵軍の投降を促しやすく無駄に戦争を長引かしてしまうことを防ぐことにある。これは近代戦争の教訓でもあった。しかし、大日本帝国はこれを批准していなかった。これに対して「俘虜」とは停戦後投降した軍人であるからすぐに故国に返さなければならぬ。日本が降伏したポツダム宣言にも明記されています。しかし、当時のソ連はアメリカとの冷戦開戦時期にあり、ポツダ

ム宣言には参加していません。アメリカ、イギリス、中華民国の三国共同宣言です。こういう経緯でシベリア抑留が行われたのです。労役も粗末な食事や待遇も国際法に違反しない。巧妙な策略です。「俘虜」という名称がそれを表しているのです。

さて、シベリア俘虜記のつづきです。前編まででは、ロシア兵の「東京、ダモイ(帰還、帰れる)」にだまされてシベリア鉄道で西へ。はるばる運ばれ下車させられたのはイルクーツク近くの缶詰工場での労働。しかしそれも長くなく、いよいよ過酷な山の材木伐採労働へ。極限の環境の中、倒れる仲間が続出、父も病気に陥り山の中の収容所病院に入る。ここでの闘病生活でロシア人との交流を通じてロシアの実態を知ることになります。そして、病氣回復後も父がロシア語を話せるということと、この病院の改革の責任からこの収容所病院に残留することになります。

では、つづきを。

流転八十年 本編より

バレー名手ナターシャ

今日も日本の衛生兵達、看護婦達の唄声が聞える。ロシア語だ。私の耳に『襲撃』というソ連軍歌で、ソ連戦車隊が日本の大部隊をノモンハンで壊滅するという歌詞で、何の内容か不詳の日本衛生兵達の唄う軍歌は看護婦カーチャーから教わったものという。私はその意味をこの衛生兵達に聞かしてやることから始めた。

掃除婦たちも何もしないで患者に掃除を任せている。患者は自分の病も忘れて一塊の黒パンの為に働いているのだ。その黒パンも患者達の食糧である筈なのだ。それでも山の収容所の生活に比べると死の労働がないだけ朗らかな空気が流れていた。

それに一週に二度程、患者達の頭髪を刈りに来るナターシャと言う人気者の小娘が訪れることだった。彼女に聞けば両親は独ソ戦の犠牲となって孤児となったが、とても愉快な少女であった。日本人に似て小柄な彼女は一人ではしゃいで踊り狂うのである。掃除婦のグーチャーもマルーシャもアガーシャも二人集まれば一人はすぐギターを奏で、他の者はバレーに合わせる。実に巧みなものだ。ナターシャは水際立って見えた。彼女たちの奏でるメロディーに踊るナターシャの姿は、すさまじく疲れ切った私たちの心を慰めてくれた唯一のものだった。

私が病棟に居残った日から正しい改革の道を実行し、掃除は掃除婦の手に、衛生兵は親切に患者への奉仕、漸次新しい空気を作っていった。病院の秩序、ロシア人の糧秣横流しの禁止、女医の徹底した取締の声でかなり立直ってよくはなったが、食糧は飯盒の蓋一ぱい足らずの水のような粥に過ぎなかった。私たちの受け持ちは内外科合わせて百八十名の大世帯だったので多忙だったが、菊池や気持ちを知る者たちの協力で漸次明るい病室になっていった。

外科患者も実に悲惨だった。凍傷患者は足や手、更には耳や鼻迄も切断しなければならず、病室は外来の患者は入れない状態になってしまった。年の瀬が迫る頃には病院は最悪の時期で死の悪魔が物凄い勢いで跳梁し、日本兵の命を奪い尽さねば止まなかった。それは栄養失調兼結核という病名のもとにあらわれ、急性肺炎、敗血症、黄疸、等々の死亡者が続出、担ぎ込まれた日本兵患者は凍死しているということも決して珍らしくない。

これらの死亡者はどんな処置が出来たか死亡書類一つ作られることなく、お骨は勿論遺髪も日本内地へ持ち帰れる状態ではなかったし、それを許すようなソ連当局ではなかった。死んだら死に放し、その死を遺族に知らせる方法も皆無で、私が作った死亡者名簿でさえ、記録したものは紙一枚日本へ持ち還ることを厳禁、ソ連当局は直ちにその場で焼却してしまうのであった。死亡者名簿すら許さないソ連当局、墓地などある筈もなく病院裏の俘虜合同墓地に運ばれ多数の屍体が埋められるのである。

これら屍体の墓穴を掘る人は日本兵俘虜中数名の作業員が当てられる。しかし冬になると大地は凍土となり二メートルは岩の固さに凍りつき、数日も昼も夜中も焚火で暖められた土地でも二〇センチメートル掘るのがやつとである。この墓穴の中にひらめのようにかちかちに凍った屍体が重ね合わされ埋められるのだが、この合同墓穴が間に合わない為に、屍室

(しかばねしつ)と定めた空部屋は裸のまま氷つてしまった屍の山が築かれるのだ。死亡者の遺族が一目見ただけで発狂してしまっただろう。

この死亡者とその墓地埋葬の手続き処置は、私は人間として決して許されるべきものではないと、世界の人權宣言に訴えたいと一俘虜の身でその当ても五十年後の今も決して忘れ得ない事実だ。凍傷患者の担当が遅れたため敗血症でその大半が凍死し、骨折の人も大部分癒着する者は皆無といつてよい。外科病棟にはラブローバーという女医の中尉が担当して毎朝回診が日課だが、手術の技術は私は一回も見たこともなく日本の俘虜の軍医中尉が受け持っていたが、彼女はただ立会うだけに過ぎなかった。内科のラピナーとは違い毎朝面白い洒落をとばしては患者を笑わせているだけで「どこ痛い？」と、日本語を試みるだけで骨折患者にこんな無意味な問いを出すに過ぎない女医だった。

多くの日本人俘虜患者の中には素晴らしい画家もいた。この女医は自分の娘の姿を画いてもらいたいと私たち二人を自分の家に案内した。渡された防寒具に身を包むと女医に連れられて二カ月ぶりに収容所の外に出た。無断で病棟より外に出たら物見楼から発砲されるが、女医といっしょだけれどその頃の外気温は既に四十度から五十度の氷点下を上下していたので、病衣や軍服のままでは一歩も外出することは不可能であった。外に出て見

ると外気に触れ露出した目と鼻は物凄いくらい寒気に刺されるようであった。

外柵を出たばかりの所に女医達や他の官舎の共同のアパートの建物がある。女医の部屋の外側のドアを開けると暖い部屋の空気が白い霧のように冷え切った私たちの体を包んだ。可愛い五、六歳くらいの少女が突然訪れた目の黒い私たち日本兵を見て、母の顔と私たちを驚きの目で見つめている。「どうぞ、どうぞ」と、覚えたばかりの日本語を使っている。私たちは次の間に通された。次の間といっても間数はそんなにはない。清潔な窓のカーテン。二重窓の上には美しい色とりどりの花々が時ならぬ真冬の部屋を飾っている。ベッド、洋服ダンス、椅子にテーブル、それに簡単なピアノが置かれているだけ。彼女が軍医中尉、夫が病院長で軍医少佐の部屋にしては実に簡素なものだ。無駄の多い日本の家屋に比べ何と軽便なものか、貧弱な家具を見て、後にひそむたくましい生活力を感じるのだ。

「どうしたの」彼女の問いに「美しい部屋ですね」心の中ではその反対のことを考えていた。この病院で、看護婦のユリーヤは大佐夫人、マーシャは銀行支店長夫人、この国に働かない人は一人もない。国から労働の義務を課せられているのだ。遊んで食べている人は婦人と言えども許されない。病弱者を除いては例外は認められない。法律と習慣を国と社会が定めていた。総べての人が働いているという事実は底知れぬ労働力を持つと

いうことである。労働も又時間労働ではなく、どんな職業でも基準(ノルマ)が定められ、このノルマにパーセントが算出され、各人に示されるため勤惰は直ちに俸給や配給キップに直接影響する。実質的な労働の成果を要求していたのである。総べての事業は国家が経営し、国民の総べてが労働者である。これはソ連の強味であることを世界に誇っていた。現在のソ連邦は、現在は理想的な国家ではないが、しかし理想的社会主義的社會が現出するのは、そう遠い将来ではないとスターリンは叫んでいる。社会主義國家の将来がこのような誇りに足るものであるかどうかは未知のことである。

山の女医

十二月末、この病院で研究会が開かれることになった。私たちは真白になって病棟の内壁の塗り替えを始めた。白ペンキかと思ったら石灰に水を混ぜた粗末な塗りものだった。大掃除も兼ねて大変なもの、集まる会員は付近の各収容所のドクター五十名程だったが九分通り女医でこの国の男子は総動員、女子も同様だったらしいが、労働を背負う主力は女子で国内を動かす原動力でもあり、たくましい肉体は既に男子と何等異なるどころはなかった。

シベリアの春

六月の声がかかるとシベリヤの野や山

に青い草が生え芽吹き始める。ビタミン欠乏症になった日本兵は凡そ食べられそうな草を探し求めるのが日課となった。よくも半年の間、一片の青ものも口にせず生きていられたものだ、自分の身体を撫でて見るのだったが、何より気になったのは足の筋肉はたるんで太くなって水膨れを来たし、手の親指で押すと皮層は凹んだまま旧には復さないし、脚部に倦怠を感じてそれが全身に伝わるようになり、動く気力を奪われるのが吾れながら悲しいのだ。雑草はあかざの葉を探し廻って食べるのが関の山、名も知らぬ雑草で毒に当てられ悲しい犠牲者を数名も出したのは傷ましい限りだった。しかし春の訪れは草木にもまして吾々人間の唯一の大きい喜びだった。分厚い防寒外套を脱ぎ、赤や緑の晴着がシベリヤの野山を彩る一年一度の好季節は私たち日本俘虜の心を蘇生させた。夕暮になると病院近くの広場から甘いメロディーが流れて、その波に乗る男女の姿も見られるのだ。

五月の太陽はシベリヤの野山に全く真夏の光を投げて膚に痛い程だ。女医の特別許可で看護婦たちと患者の部屋を飾るため山へ花摘みに出かけた。銃を持たない警戒兵が一人付き添って病院の門を出て小川の流れに沿って歩き始める。日陰の方はまだ氷が残っているが、水は小さい流れを作って野には小鳥の声、草は天地に萌えているのだ。山の奥深く進むにつれてつつじの花が果もなく続き福寿草やチューリップ、名も知らぬ雑草の花々が

が果てない天地を色彩つて止まない。この野や山を埋め尽した美しい花々の姿を見て、あらためて私たちはまだ生きていられたのだという異境での喜びを心の底から感じたことだった。けれどもこの深い春の天地をとび廻る自由は囚われの身には与えられていなかった。心は勿論私たちの足や体も野山を歩くだけの力ももう消耗し尽されていた。病院に帰り着き、もう立てなくなつた自分の足を見つめるのだった。お互いに採って来たつつじの束を見せ合つた「なぜ、あなた達日本人は未だ咲かない花ばかりなの？」女医は私に聞いた。私が見ると私たちの花は蕾のままだったがロシヤ人達の持つつつじは悉く今を盛りと咲く花ばかりだった。これから咲くだろう蕾を愛する日本人と咲き揃つた花を愛する彼らとの違いも花々に比べて思い見るのだった。

銃口の前で叫ぶドイツ兵

六月に入るとシベリヤは全くの夏と変わつて病棟の庭の砂はま熱砂と変わり、夜も眠れぬ暑さと白夜が訪れる。白い夜だ。夜十時を過ぎても暮れることはない。天地は薄明るく太陽は山に沈まない。シベリヤの広野に近づいたかと思つたらもう離れて明るい昼となつて大地に輝く。漸く気心を知つた看護婦や掃除婦達は誰に遠慮なく半身裸体になつて私たち日本人にバケツで水を浴びせたり、水の掛け合いなどをやって日を過ごすのだ。

この頃になると、私たちを心から喜ばしてくれる。何よりも嬉しいのは死亡する日本人仲間の数が少なくなつていくのだ。又元気を回復した患者達が小石を拾い集めて碁を始める。紙の将棋余念のないさまを見ては、私たちは溢れる喜びを感じずにはいらなかった。

柵内の散歩が許される。冬は夢にも考へることの出来ないことだ。私もいつか仲良しになつたドイツの入院兵と二人で外柵の内側に沿つて散歩を常としていた。鉄線を巡らした柵の外から突然、ソ連警戒兵が私たちに銃口を向け、「柵に近寄るな」とどなりつけた。私は知り合いの兵だったので気にも留めなかったが、ドイツ兵のヘルは手前に向けられた銃口をにらみつけ大声で顔色を変え、ドイツ語で非常に怒つて何事か叫んだ。ソ連兵は笑いながら銃口を引くと去っていく。私がヘルに聞くと戦争は終つた。お前は何故銃を向けるのか、と言つたのだと彼はロシヤ語でこう説明した。

ドイツ兵の彼は豊職人だという。ドイツ人は気骨において病の身でもちよつと違つている。この頃からソ連も食糧状態が漸く良くなつたらしく、米の粥に近くのバイカル湖から送られる生魚が私たちの食膳に上り始め、ほんの少し宛ではあったが食糧は私たち俘虜にとつて命の糧又心の糧で、明るく上向くのだ。それは死亡者が漸次下り坂となり始めたことであつた。

彼女とバイカル湖

静かだつた病室が急に騒がしくなつた。ひとりの看護婦が涙に濡れた顔で女医の部屋に駆け込んだ。間もなく私は女医の部屋に呼ばれた。ドクターは私の顔を見るや否や、菊池はけしからん、事件を彼の口から調査しろと言つた。

事件は大体こうだ。看護婦のガリーヤーが手術室の前を通りかかると小さい菊池が働いているのが目につく。「菊池は小さい」彼女は先ず声をかける。菊池は何だ失礼なとばかり「ガリーヤーは大きい」とロシヤ語で応酬する。「大きいとは何が」と笑顔で聞き返す「大きい所は、遠くて広い」菊池は言う。

「遠いとは何です」彼女は眉をひそめる。「水があり、魚が沢山いる」菊池は巧みなロシヤ語で落ちつき払う。「何処です。何のことです」もう彼女の顔は微笑の影はない。「バイカル湖、オーゼロバイカローム」菊池が極めつける。突然泣き声を上げて女医の部屋に駆け込んだガリーヤー、菊池が淑女の私を侮辱したという訳。ドクトルは菊池を前にして厳然と言つた。彼女に対して謝罪するか、炭坑に行くか、二つに一つを選ぶべきだと。私は菊池を辱かしたしたのは彼女だ、彼女こそ先ず菊池に謝罪すべきだと強硬に言い張つたが女医は聞き入れようとしめない。後一時間の猶予を与えるという返答だ。菊池は部屋を去つて行つた。私はドクターに再三抗議したが、これが私の命令だ

と答えた。そもそも、彼女はバイカル湖だ、というソ連のシヤレは駄ジャレで彼女は淫売婦だということだ。性具は深く広く誰でも自由に泳ぐことが出来るということらしい。こうなれば私も決するところがあった。菊池のベッドに彼を訪ねた。リュックに持ち物をすっかり詰め込んだ彼は毛布をくくりつけて旅の決心を見せていた。「菊池君、僕も行く」私は彼の肩に手を置いた。「僕の自由にして下さい。大尉殿には関係ないことですから。」約束したではないか、何処迄も生きのびるんだ」彼の涙が私の手に落ちた。

次の日の午前に来たトラックに乗せられて二人は七カ月の長い冬を過ごした俘虜収容病院を後にした。日本兵患者は泣いて別れを惜しんでくれた。その涙を見て私はよいことをして来たのだと心からこみ上げて来る喜びに涙が止めようもなかった。トラックに乗ろうとする私に、看護婦のユーリヤが一本のニュームの大匙を渡して私の思い出という意味のことを言い添えてくれた。そして沢山食べるとも言った。私は四十五年を経たそれを京都の家に持っている。明日から、果のない炭坑での闘いを山の伐採場のそれを覚悟した。

私たちに便乗した顔見知りの警戒兵が列車に乗り込む。何故お前達は病院を去るのかを尋ねる。「原因はバイカル湖だ」私は言う。「君たちとバイカル湖と何の関係があるか」事の顛末を彼に聞き終ると腹を抱えて笑う。「全く彼女はバイカル湖

だ。今でも何人の男を持っているだろう」と笑いを止めようとしなかった。東に走っていた列車はイルクーツクに着くと停った。

再び山へ

イルクーツクの大収容所に着いた私たちは、身体検査のため例により裸体とされて何も持っていないのにと不審に思ったが、あのダイヤモンドは瞬時にも忘れたことなくガーゼに包んで肛門の奥深くさし入れて発覚を免れることが出来た。何時の日かの逃亡を忘れることはなかった。命の次に大切なダイヤモンド七個である。

健康者と折紙つきでその翌日の午後、二百名一組の大隊が編成され、初めて会った仲間交って思っていた通り再び山の伐採場へ出発することに決った。山にはまだ青葉が茂っていたので当分寒さで死ぬことはないと一安心はしたけれど、やがて訪れる冬を生きて越せる自信のある人は誰もいなかった。

出発前に収容所長はお前は将校だし、ロシア語も達者だから長になれと指命された。自分一人の命さえ守り兼ねている現在どうして他人の命までも守れることが出来よう、私は極力辞退したが、多数の人が希望するところとなって止むなく大隊長に選出された。

列車を降り、トラックで山の支線に約八時間、十数台で山の中の収容所に辿り着く。門の中では既に前からの仲間が私

たちの到着を首を長くして待っていた。長い旅の疲れを休める暇もなく翌日から着のみのままの姿で仕事にとりかからねばならなかった。仕事は以前からいた仲間が既に物凄い量の木材を切り出していた。涼しい風が夜になると急に冷めた風に代り木々の葉も茎までも払い落してしまふのだ。

九月に入ると降雪を見た。雪はさらさらした砂だ、水分は全くない。これがシベリヤの雪だ。一度降った雪は消えることはない。その上に又さらさら雪が積る。大地に二、三度降雪が訪れて固められ凍り切る、大地も堅い岩となって凍る。そして地下も三米から五米は堅い氷の岩となる。これが地下水結だ。もつと詳しく言えば地下三米より下は氷久凍土だという。

ソ連の作業監督は兵士と違って専門の係官で、作業班毎に労働のノルマ(規格)に照らしては毎日の仕事の量をパーセントで記帖していった。幾糶(幹の太さ)の松の原木を幾本で何パーセントという量が定められているので、怠けたりすれば忽ち自分達の食糧にはねかえり、腹を充たすのに身を粉にして働かねばならないような法律を定めていた。飢えをしのぐため労働が強化されるし、皆協力してノルマを上げれば黒パンは豊富に支給されるというノルマ労働は、ロシア人はもとより日本俘虜にもこれを適用していたのである。これが食糧だけでなく労働に対して賃金も支給しなければならぬ

国際法が定められていたが、前述したようにソ連当局はこの法規をも無視して日独伊の俘虜に数年ただ働きを強いたのであった。それに、飯盒の蓋一ぱいの粟の粥ではじつと寝ている身でも養い兼ねる。迫る飢え、襲う寒気、強いられる労働、私は今集合を終えて山へ狩り立てられる同僚がこの門に帰り着くのが幾人か、今日も又心を労するのであった。僅か一口の増配の粟の為、それに数倍する労苦しなくてはならない吾々は一日一日と我が身を削っていくようなものであった。

本格的な冬が訪れ始めると、疲れ果てて続々と倒れる友、こんな日が果しなく続いた。夢にも忘れられぬ故国日本の姿。「お前達はもう直ぐ帰れる。しっかりと働け」幾度聞かされたであろうこの言葉。この絶望の果には、自分の身を守るに必死の恐しい同僚相食む、盗みといがみ合いが暖かくなるべき収容所を地獄にしたのだ。働きが悪いためという名目で営倉に入れられて死の折檻に会う友も出る。収容所の井戸水さえ全く凍りついて、水を割っては水の代用にする。唯一の喜びの日曜日さえ、入浴を喜ぶ気力もなく一枚の毛布にくるまって板の間で休むのが常だが、この日曜さえ働きの悪かった組の者達は山に追いやる鬼畜のロシア兵だ。

山の労働は、伐採班、堆積班、運搬班、自動車積込み班に分れての仕事である。伐採班は二人一組で立木を伐り倒し、堆積班は四人一組で枝を払い適当な長さに揃えて堆積する。運搬班は馬一頭を与え

られて一本宛自動車道路迄運び出すのだが、直径五、六十糎以上もある千年の古木がいていと大空を摩して聳える無限のシベリヤ原始林は伐つても伐つても伐り尽せるものではなかった。

シベリアの秋

八月に入ると山は急に秋景色に変わってしまう。唐松や常盤木が黄に紅に山の姿を美しく彩った。松の根本には種々の「きのこ」がまるで群を作っている。この「きのこ」が腹のへり切った私たちの腹の補給にその役目を引き受けてくれた。持参した飯盒でゆでると塩で味つけをする。途方もなくうまい料理が出来上る。

しかしこの「きのこ料理」もそう長く続かない。再びあの冬が私たちを迎えに来た。けれど外の嵐がどんなに吹き荒ぶとも、内に安息所さえあれば人は生きていけないこともない。だのに人の命の糧とたのむ僅かに蓄えた食糧を盗んでいくのだ。冷めたい水を飲んでみても何の足しにもなりはしない。パンだ。一片のパンだ。あの輸送の途次捨てた黒パンが幾度も物凄い魅力で私たちの臉に浮かぶ。他人の命の糧を奪うなど、どうしてできるのか、人間のすることではないのだ。ただ少数の人の良心だけがこの收容所の支えとなったのだ。

死の悪魔と闘う今、手をとり合うより闘う方法はない。かつて我等の戦場は食べる食も家もなく雨と泥にまみれて、飢

えと疲れて死闘の戦地に生きてではないか。粟でも食べるものはある。毛布一枚でも住む家はある。寒気には古びた防寒衣もあるではないか。それにこのシベリヤには日本女性も俘虜として入ソしている。私たちは男だ。死に臨んでも節を屈すべきではない。收容所秩序を立直すため心ある少数の友がのろしをあげたのだった。

凍る天地

馬の用意が出来た。橇に乗る。凍った天地を、返って橇は矢のように飛ぶ。馬よ飛べ。骨を刺すシベリヤの山、私たちの顔をどす黒く光らせる、白一色の天地、凍った霧がさんさんと光りながら私たちの上に降りかかる。白樺の林は白く凍り切って氷の林みたいだ。天地すべてが凍りきってしまった。

伐採班が松を倒している。半分程鋸を入れた大木が、傾いた重みに堪え兼ねて切れ目からつぺんまで大きく裂けてきりきりと二つになって冲天に舞うと見る間に雪煙立てて白煙を上げるのもある。凍った松が裂けて飛ぶ、大木が大地に叩くこだまの音は正に壮観だ。丸木の一方の端を橇の後端にとりつけて自動車道路迄運ぶのが運搬係の仕事、この大木をここで橇に持ち上げる、腕にもう力が抜けてしまったのが悲しく感じられてくる。四時には仕事を終えて收容所に還って行く。水みたいな粟粥では、食堂から部屋

に帰りつく迄に元の腹になってしまふ。また一枚の毛布、あの板の間、何を考えているのか皆黙り込んでいます。

人肉売る老婆達

”資本主義は究極の所、利潤の獲得である。市場の獲得は必然だ。新しい植民地が地球上に現出しない限り、この獲得の為戦争は必ず起こる。資本主義と戦争は離すことは出来ない。アメリカ資本主義は人類の敵だ”彼らロシア人はレーニンの言うことを我々に教え込もうとした。

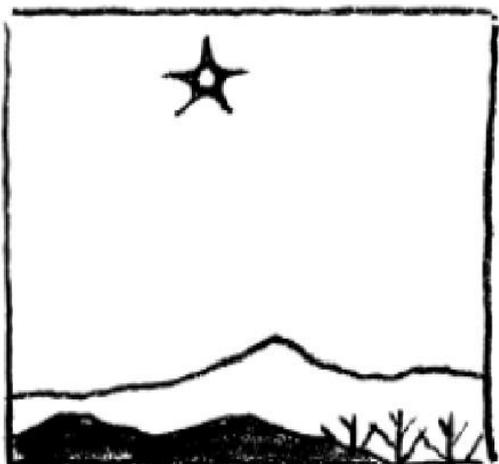
その頃理想的な社会主義的社会的実現に進んでいるであろうこの国の一都市にこんな戦慄すべき事件が起きた。私たちの住むイルクーツクから約二百軒のウラシンの自由市場付近で安価な生肉を販売していた老婆達の一群があった。食糧危機がソ連全土を襲っている最中であつた。何の肉だか知れないが、食べられる肉なら買いあさられた。けれど彼女たちの販売は長くは続かなかつた。生肉の中から幼児の指先の爪が発見されたからであつた。この恐るべき犯罪者は民衆の面前で証拠の品を突きつけられながら、射殺されてしまった。ウラシウデ收容所の日本兵が持ち込んだニュースである。

本編つづく

また、父が存命で私が子供の頃、京都の我が家には奇妙がスプーンが一つあつた。これがユーリヤがくれたニュームの

大匙であることを知つたのは父がこの記録を残してからずいぶんたつてからである。その時はすでに父は亡く、スプーンも失つていた。ニュームとはどうやらアルミニウムのことらしく、大きなスプーンのわりには軽かつたのと表面がツヤ消しであつて独特の色合いであつたのを今でも確かに覚えてる。今考えると当時のアルミニウムといえば大変高価であつたらう。そんな大事なものを記念に与えた彼女の気持ちはどんなであつたらうか。

比較的余裕のある收容所病院を些細な理由で去ることを決心した父の思いは計ることがしれないけれど、生きるという目的が本能的にそうさせたのだろう。再び過酷な境遇を選択した父の運命はどう展開するのか。



二〇一六年九月三〇日(金)

光ちゃん(ペンネーム)はちようど一歳の誕生日を迎えた。

三歳ぐらゐまでは誰でも誕生日の記憶はない。でも、初めての誕生日は親やじじ・ばばにとつてはビッグイベントである。

光君の父親は張り切つて光君の食べるケーキを手作りした。母親は誕生月の「9」を表すクッションを手作りした。また、

「HAPPY BIRTHDAY!

HAPPY BIRTHDAY!

と書いた旗を万国旗のように天井に飾つた。百均で買つてきたそうだ。

じじ・ばばは手で押す「カタカタ」を贈つた。そしてみんなでケーキを食べて光君の初めての誕生日を祝つた。誰かが光君の相手をしないといけないので一斉には食べられない。自分の誕生日は子や孫の誕生日の様子から想像することができ。家族に祝福されたに違いないと。物心のつく前から人生は愛に包まれて始まつているのだ。

親につかまり立ちしながら、一步、二歩と足を交互に出し、「歩く真似」のよくなことができた。ふすまのかけから「いないいないばあ」のようなことをして喜ぶ姿が可愛い。

今回は、平安京の大内裏の南正門に当たる朱雀門が倒壊するのを予言した僧の話です。教科書に出ない度は二／五。

僧登照、朱雀門が倒れるのを言い当てた話し(巻第二四ノ二)

のぼる 今は昔、登照とうしょうという僧がいた。

人々の人相を見て、その声を聞き、そのふるまいを観察して、その人の寿命の長短や、将来の貧富や出世の有無を予測し、本人に教えた。このように占うが、よく当たるので、都の人々、男女を問わず、僧俗を問わず、この登照の家に無数に集まつてきた。

ある時登照が街に出掛けると、たまたま朱雀門を通り過ぎた。この門の下に老若男女がたむろして休んでいるのを、登照ふと見ると、この門の下にいる人々の顔には、今すぐにも死んでしまう相が出ている。「これはどういふ事だ」といぶかつて、登照立ち止まつてよく観察してみることが、確かに死相は明らかだ。

登照、この原因について思いめぐらすことが分らない。「この人々がすぐにでも死ぬ、ということは何によるのだろうか。もし悪人がやってきて人殺しをするにしても、殺せる数には限りがある。この人々

全部が一度に死んでしまうようなことはないはずだ。不思議なことだ」と、考えあぐねていると、

「もしたつた今、この門が倒れるとしたらどうだ。そうしたら、門の下の人々は皆下敷きになつて死んでしまう。」と、思いついて、門の下で休む人々に向かつて「大変だ!この門が今倒れて、下敷きになつて死んでしまうぞ。早く逃げる」と大声で叫ぶと、そこにいた人々は、あわてふためいてばらばらと逃げ出してきた。

登照も、門から遠ざかつて、様子を見ていると、風も吹かず、地震で地面が揺れたわけでもなく、みじんもゆがんだりしているわけでもないのに、朱雀門が急にどんどん傾きだして、遂には倒壊してしまつた。こんなわけで、急いで逃げ出した者たちは命拾いをした。しかし中には、登照の警告を疑つて出遅れた少数の者は、門の下敷きになり死んでしまつた。その後、登照が人に会つてこのことを語ると、聞いた人々は「さすがの登照どの、不思議を起こされる」と褒めそやした。

* *

また登照の住む僧坊は一条のあたりにあつたので、春の頃、雨が静かにふる夜、その僧坊の前の大路を、笛を吹きながら歩いていく者がいた。登照、この笛の音を聞き、弟子の僧を呼んで「この笛を吹いて通る者は誰とは知らぬが、命がひどく少ない音色に聞こえる。この者に告げ

てやりたいものだ」と言つたが、雨が激しく降つていたので、笛を吹く者は通り過ぎていつてしまい、告げることができなかった。

明るる日、雨は止んでいた。その夕暮れに、前夜の者がまた、笛を吹いて返つてくるのを、登照が聞いて「この笛を吹いて通る者は、昨夜と同じ者だ。不思議なことがあるものだ」と言つと、弟子「同じ者でございましょう。どうされましたか」と問う。登照「あの笛を吹く者を呼んでこい」と言つと、弟子は走つてその男を連れてきた。

見るとまだ若い男であつた。侍だろうと思われた。登照は、その男を呼び出して言う「おまえさん呼び出したのは、昨夜笛を吹いて前を通り過ぎたとき、その命が今日明日のうちに終わるといふ相が、その笛の音に聞こえていたので、そのことをお教えしようとしたが、雨がひどく、そなたも通り過ぎてしまつたので、それができなかった。それが残念でしかたがなかつたが、今夜この笛の音をお聞きすると、遙かに命が延びられた。昨夜どんなお勤めをされたのか」と。

侍の言うには「拙者は今夜特別にこれと言つた勤めはしておりません。この東に川崎(観音堂)という所で、人々が普賢講を行っているので、その迦陀(かた)に付けて、夜を徹して笛を吹いておりました」と。登照、これを聞くと、「きつと普賢講の笛を吹いて仏縁を結んだ功德に

B級サラリーマン渡世譚 (39)

明石 幸次郎

よって、たちまち罪が許され、命が延びたに違いない」と思うと、心から感動をして、泣きながら男を拝んだ。侍も喜んで、ありがたがって帰って行った。

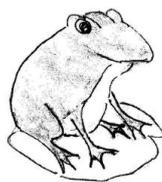
これは近頃のことであつた。このようにあらたかですばらしい人の相を見る者があつたと伝えられているとか。

《コメント》

この登照という人物は、平安中期の有名な相人（占いをする者）だそうです。

朱雀門は、大内裏の正門で、二条大路と朱雀大路（今は千本通り）の交わる地点にあつた巨大な建築。この門は実際には、西暦九八九年の大風で倒壊したということです。

しかしこの話のように風も何もないのに、急に巨大建築が倒壊する、というのが、はるかにインパクトがあります。私は昔読んだ埴谷雄高の小説を思い出しました。それは、巨大な樹木の茂る森の中、一本の巨木が、ある日何の原因もなく倒れもなく、突然倒れて、それからドミノ倒しのように次々に倒れていく、という印象的な内容だったのでした。



弊社のコミッションをこれ以上切るとマインナスになります。これでは、ビジネスをやる価値を社内でも問われます。それは、電話でお話し致しましたね、N川さん」と、話が水掛け論になりかけた。

その時に、ドアをノックしてK口と同じ課の女性がコーヒーを運んで来た。女性は洗練された仕草で、コーヒーカップを各自のテーブルの前に置いて、失礼しますと言つて出て行った。

I川課長が「珈琲ブレイクにしましょか？まあ、お互い、知恵を出し合ひましょうよ」と言つたので、皆は一斉にコーヒーを飲み始めた。

「処で、M居さん、本案件で、ウチが口銭ゼロで入札価格を下げたとすれば、何か他で埋め合わせをして貰えますかね？それは、可能ですかね？」と、早速知恵を出した。

M居は「I川さん、埋め合わせと言われるのは、具体的にはどれ位の額なの？」先程のコミッションからお話ししたいと言つた時の懇願的な口調と変わり、上から目線の強く出る口調で問うた。

I川課長は、にっこり笑いながら、片手を広げて「どうですか？これで！何でしたら、今度、お宅から、A杉さんが現地に飛ばれるようですので、私が同行した場合によっては、現地でお話しさせてもらつても構いませんが？」M居とA杉課長と関係を理解した上での発言をして、M居の決断を待った。

M居は「I川さん、片手はないわ。それは、無茶ですよ。いくら元商社マンのA杉でも、それは、絶対飲まないわ」「それなら、M居さん、貴方なら、いくらまでなら、我々の商社としての動きを金額にして、評価して頂けますか？」

「I川さん、評価と言ひ方は、色々解釈が出来ますわ。安値で落として、それを評価してくれと、五パーセントのコミッションを要求されても、分かりました、と言う訳には行かへんわなあ。N川お前はどうか？どう考える？」とN川に水を向けた。明石はN川がどう答えるかN川の方に顔を向けた。

「M商事さんは、日本の五大商社という事で、自負し誇つておられますが、ロッキード事件以来、社内的な制約と評価と色々な難しい問題があたりだとは推測します。大課長が、たかが四く五億円の入札で、しかも、まだ落札するかどうかわからない時点でコミッションが五パーセントでどうのこうのと言われ、目先に商売だけにとらわれておられるのは、如何なものですか？もっと、このバングラデッシュという世界最貧国へ、どうM商事という商社機能と、K社という、メーカーの力で日本の援助資金を使い、この国の発展に関わっていくかと言う位置付の中での、今回の灌漑用エンジンの入札です。今回は、是非、落札して実績を積んだ上で、我社は大型ポンプもバルブ、水道用鋳鉄管、農業用機械、エンジン、建

機を製造していますので、必ずや、この国の灌漑、インフラ整備などの建設に貢献できる会社であることを、農業省辺りに大いにPR出来るチャンスでもあるのです。そこは、他メーカーには、出来ない我が社の強みであるのです。私はこの事をK口さんに説明しても、余り理解して貰えない。価格競争だけではない、弊社のエンジンだけではない総合力をもっと現地でPRをして、貴社が灌漑・インフラ整備などのプロジェクトをプランニングして現地大使館に働き書けて下さいよ。その様な仕事は総合商社の人脈とネットワークでしか出来ないと思っております。M商事さんが出来なければ、あとの大手商社に話を持って行くまでですが「——と、日頃の思い含めて、次元の違う意見を述べた。

明石はN川が、M商事の三人を前にして、目先の口銭を追うだけではなく、大商社でしか出来ない仕事があるではないかと堂々と述べたことに、見所のある社員であると感心して聞いていた。

M居は、この事に対してコメントを挟まず「N川、お前のご高説のビジネスプランは、日頃から聞いている。それは、その通りで、これからの課題である。それで、現実に戻すと、今日はやなあ。入札オツプアー価格の結論を出さないと、我々が東京まで三人が交通費を使ってきた意味がないわ」

そこで、今まで何も発言しなかったO

和田が無表情で「M居さん、N川さん、どうでしょうか。今日はI川が申し上げた五パーセントの口銭をM商事の今日現在の希望額として、理解して頂き、あとは、現地でA杉課長とI川とで、落札後に話し合うという事でどうでしょうか？」とまともに掛かった。

M居は「O和田さん、アンタはいつも、しゃあしゃあと言いくい事を千両役者みたいにさらつと言われるが、五パーセントの口銭は物を作るメーカーからしたら、赤字すれすれのレベルからしたら、大きい金額なんやで！」と目を吊り上げて、答えたので、場の雰囲気为重くなりかけた。

M居が「明石、君は営業をしたことがないが、購買マンとしては、七年の経験があるやないか。お前の意見はどうや？」と明石に発言するように促された。

オクラの山たより (1)

因生

以下、くだらだらと書いていく文章は筆者が聞きかじったこと、読みかじったことをあやふやな記憶に任せて書いていくだけのこと。ゆえに「オクラ」入りする文章が山のようになるであろうと予想し「オクラの山たより」と題した次第。以下の文章は筆者、請け負ってもいいが、毒にも薬にもならぬ話が続くはず。書き出しにあたり、まずは筆者から一言お断りする。

さて、「首が飛んでも動いてみせら——」という歌舞伎の名セリフを御存知だろうか。もちろん、これは稀代の悪党である民谷伊右衛門が、「東海道四谷怪談」の隠亡堀戸板返しの場合で小悪党の直助に語るセリフである。例の河内山宗俊の「悪の強きは善の元」とならんで筆者の好きな名セリフであり、大音声でこのセリフを語りつつ一度は大見得を切ってみたいものと思うのだが、小心者の悲しき、筆者にはついぞそんな機会はおとずれない。しかし「首が飛んでも動いてみせら——」に匹敵するほどのタンカを切って見せ、しかも一庶民それも女性でありながら、平安時代の歴史に自らの存在を記録させた上にひところ日本史の研究者たちの間で議論を引き起こしたとあっては誠に小

気味よい話、少し気になるではないか。この女性の名前、年齢、容貌はまったく分からない。筆者のイメージでは若い女性だろうと思うのだが、残念ながら記録に断片的に出てくるだけなのだ。この女性の先祖の身分は分かっている。「奴婢」である。古代の律令制度においては「奴婢」は個人や公的な機関(役所や寺社)に隷属して家内労働に従事したとされる。「奴婢」は所有者の財産の一部として自由に売買された。ほぼ奴隷であるといつてよい。ただし平安時代中期つまり十世紀には奴婢という言葉はあるものの実態としての奴婢はなくなっていたというのが日本史家共通の認識。そんな時代に一人の女性が役所に「百年近く前に奴婢解放令が出ているはず」と訴え出たという。「奴婢解放令」といえば、「奴婢解放令」。日本史研究者の議論がわき上がったのも無理はない。以下、この訴えの概要をかいつまんで述べてみよう。

長徳三年というから西暦九九七年の十月二十七日のこと。京の明法家(法律家のこと)は但馬国朝来郡司の全見^{またみ}奉^{たか}章^{あき}から一通の質問状を受け取った。今でもよくあるらしいが、地方の行政官が自分の手に余る懸案事項を中央の専門家に問い合わせを行ったのであろう。内容は以下の通りである。

但馬国朝来郡の一女性は郡司の先祖が



よ。」

延喜格といえは古代の日本にあつて最も基本的な法となつたものの一つ。解放された奴婢出身の彼女の勢いに困り抜いたのであろう。郡司は京の明法家に対して次のように質問している。

「このようなことは都以外の地では決められません」格以前に先祖の貯える所の奴婢の子孫、本主の子孫のために礼節あるべきやいなや」
いうまでもないが「本主の子孫」とは郡司のことである。

結論から先にいうと日本古代史の研究によれば延喜格がつくられた延喜の頃、つまり十世紀はじめには先に述べたように奴婢制度は有名無実化していたが、「奴婢制度解放令」についてはたぶんなかつたらう、ということである。「なんだ、だめじゃん」といわれそうだが、「解放令」があつてもなくても、奴婢の子孫、しかも一女性が、但馬という地方で、明確な法意識（権利意識といつてもよいだろう）をもつて、自らの不利益に沈黙することなく、旧主の子孫である郡司や国司に対して訴える行動に出たという点に驚かされる。くだいようだが今から千年以上も昔のことである。この質問状が出された翌年の長徳四年、大内裏の職御曹司では中宮定子に仕える清少納言が元気に動き回っており、紫式部はまだ宮中に出仕はしていない。この但馬国の

一女性ほどに自分には自己の不利益に対して堂々と法にもとづいて主張できるかしらと思うといささか赤面するが、こうした女性がいたということは大いに勇気づけられることではないか。

なお、明法家からの返事は現実には奴婢制度がまったく消滅しているのに、二百年以上前の法令（「弘仁式」「大宝律」）にしたがつて処理せよ、であつた。「事件は現場で起きている」ではないが、この現場無視の返事では郡司はますます困惑したに違いない。この但馬国から来た問い合わせの記事は寛弘五年（西暦一〇〇八年）に編纂された法律書「政事要略」八四「告言三審誣告等事」の項におさめられている。

蛇足ながら念のために一言。我が国において人身売買によつて家内奴隷となつた人々は「下人」「所従」とよばれ、中世には多く見られた。謡曲「隅田川」をはじめとして多くの中世の文学作品に書かれている。我が国において形式的であれ人身売買がなくなつたのは、年季奉公が主流となつた近世中期以降であらう。ただし、遊女奉公が実質的に人身売買ではないかというならば、昭和の時代ということとなる。さらに異国までみれば、かのイスラム国では公然と奴隷売買がされているという。

編集後記

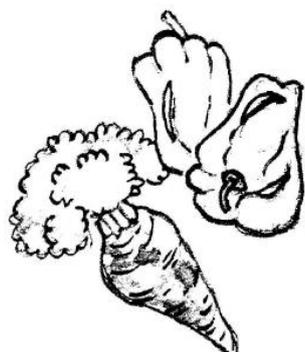
季節の変わり目に、台風の影響もあつて変な天気かつつき体調を崩された方も多いかと思ひます。

皆様お身体をご自愛ください。
おかげさまで、寄稿者が二人増えました。

「オクラの山たより」の困了生（ペンネーム）さんと俳句の影山武司さんです。お二人とも学生時代の知り合いです。若い時の友人は、何かにつけて有り難いものです。

私も、おかげさまで体調も良く奇跡的な回復をしました。皆さんの励ましのお陰と感謝しております。これからも、皆様のご恩に報いるために「芥川だより」を発行しつづけていきます。

人と人が互いの想いを伝えあつて理解することが大切だと考えております。今後ともご支援をお願いします。（嘉）



くぎぬき(化粧用)

「ああしんどかった」孫娘がこぼす。
「なんやこの位のこと」
墓参りを終え、ぼつぼつ帰り支度らしい。化粧ポーチを出し、いきなり釘抜きを目に当てている。まゆ毛抜くのか。おばあさん何も知らんのかな。。

相手にせず片手に鏡、テーブルの上にポーチをのせ器用に顔に変化をつけてゆく。
出来上がった顔を見て「この位ならいいわ」と点数をつけて。お茶でも飲んだらの声に我にかえったみたい。

かつて電車内で化粧する女性については、いろんな批判も多いが、そんな声も今ではあまり耳にしない。車内で飲食する人、ケータイで話している人。

見知らぬ人々が乗り合わせる電車という公共の空間が、手前勝手に行動出来る空間へ変化していく。車内でメイクする人など見慣れてしまった自分にもあらためて気づかされた。

昔を懐かしむ

休耕田の草にかこまれ、秋風に体をまかせて、腰をおろし、しばらく

昔のことを思い浮かべる。安ペー犬は、時々「バアさん何考えてんのや、早うあの道へゆこうよ」とうらめしそくに尻尾を目の前で振って催促している。

昔、「田の草取り」は過酷な重労働の一つであった。今は何もかも機械化して、「さし苗さし」も見られない。除草剤もあり、農家にとつては朗報であったが、昔のきねづかは「毒薬だから」といって不満顔。炎天下をほうよにして草取り、一番く4番でぬり草。大変な経験であったけれど、年老いてみて振り返ると、これが今の自分の身体を支えた健康の素であったのかと感謝。

この時期が来ると思い出すのは、二宮尊徳の和歌を

「この秋は雨か風かは知らねども今日のつとめに田の草取るなり」

「やるべき時にやるべきことをする」と励まして自分の行動に反映させているのだが…。

捨てられない柳行李

さあポツポツ身辺整理をやるうかと。

今ではあまり目にする事が無い柳行李。

嫁入り道具のひとつである。戦後

のことで両親がどうして手にいれたかは知らないが、苦労の一種だと思つて私は大切に使用し中味は入れ替わっているが。

トラックで運ばれて嫁家先で下された道具の一つ。「まあ田舎ってこんなものも嫁入道具なの」と笑われたものだが。

大分に色あせているが私の生活を見つめて、共に苦労してきた柳行李であり、時には赤紙もはられ七〇年を経ようとしているのだ。まだまだ充分に使えるし、中味は変わってきているが、二人の子供を背負ってきた「ネンネコ」が入れてあり成長期を物語っているように思われ、そのまま又押し入れに納まつていたのだ。

処分しようとは何度か繰り返して又今日、ちようど孫娘が来たので、柳行李のネンネコを見せたら「お父さん背負って歩いたんファン。古臭いもん、あつさり捨てんかいな…」とぬかす。「お前たちにわかるか」私も負けてはいない。

でも年齢もあり、あつさり物をへらしておかなければと、今度こそは…。

思い出がつまった柳行李は、やっぱり捨てられない。

この道はいつかくる道

自然にまかせつつも自分自身を、またお互いに力を合わせて工夫しながらいくことが、ボケない大切な方法のようだ。

空き家はつぶれる…。人間の体かて使わな、おとろへてゆく。人の頭かて使わなあかん。

四苦八苦：

昔から生きてくつて十のうち九まで苦や、四苦八苦して苦勞することが生きてる証拠や。

ただ大切なことは、苦勞を楽しむことやて。苦勞することが生きる証拠や。それでこそ最後の「残り少ない」楽しみが生きてくると思う。

歩け、動け、こけるな…。体を動かすこと、足腰を鍛えること。足腰の上に頭がのつて人やもの。笑え、人の輪に

おかしかったら大きな口をあけて笑うこと。しのび笑いはせんこと。おしつこちびつたつてええやんか。そして、人の中へ人の中に入つていこ。輪は私やで。

(わらじ医者より抜粋)

おらん所で

「おらん所で魚を釣る」居るところで釣るのが普通。「おつても釣れな

いのは下手」

友達が体をこわして元気がない。なんとかして早く元気になってほしいと祈るような気持で、そうだからの店へと足を運んだ。店前にはなし。「入荷の見込みはありません」たった一言。

おたがいに「世渡り下手と」いうのか、もう少し余裕のあるコトバが欲しかった。別にほめられた話ではないけれど。しかし、人のせいにしては駄目、よしもう一か所。気のせくままに足を運ぶ。

「いらつしやい、何か」と私の手をとるようにして耳をかたむけてくる。張りつめていた気持ちもどこへやら。

人間の本当の心から出る美しい言葉や行動は、必ず人を動かす力があり、まごころを呼び覚ますものがある。そして先ずは自分のまごころをとすのが先決。

「おらんところで魚を釣る」は出来ない。

わたしの気持ち

なんでこうなるの。もう年だから、と返事がかえってくる。杖が必要になってきたこと。めつきり歩くことが苦痛になってきた。足がどうやら

上がっていないらしい。

何もないのにヨロヨロとこけそうになる。何でこうなるの、自分で口にする。

梅田の本屋さんへいつて注文品を受け取り、ついでに、こちらへんにお地藏さんがあったなアと。赤いチヨウチンがさがっていて、とたずねたら大分長い間考えてやつと教えてくれた。なんと近くまで来てるのに、こんなことがわからへん？私もついにボケが来たなア…。

しばらく腰を伸ばしてながめること。突然「そこいてヨ」といわれて「ハッ」と気が付いたら、真ん中で立っているのだからムリもない。

あの歩きかた何ヨ。お尻を思い切り振って「誰に見せてんネ」聞こえよがしに舌打ちしてあびせてやりたい。負けてたまるか。

老いた耳

「聞こえない」他人には、それがわからない。何度名前をよんだやらとハアハアと息を切らして私の背中をたたく。

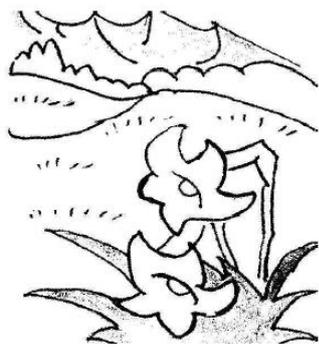
目の悪いのや、足が不自由なのは見ればわかるけど、老いた耳は自分しか。

仕方なくわかったふりをしてあいまいな返事をするものだから変な顔をして私を見つめている。聞こえなくなった耳は、もう戻らない。

それは病気ではなくて、「老化」だから。医者にもいわれ、自分に得と言いつけて聞かせている。「アハハハ」と笑っているが、この心の悲哀を誰が知る。

重ねてきた歳月は二度と戻りはないのだ。

私は、なんだかうら淋しい。心細いような気持、心配になってしまふしつかりせんか。



俳句

土田 裕

今日あたり聞き納めかも法師蟬

陽を受けて紅の深まる唐辛子

田も畑も家も流して秋出水

川風と遊ぶがごとき尾花かな

虫を聞く昔語らふ妻と居て

影山 武司

法師蟬聞きつ独りの夕餉かな

桃を剥く指より汁をしたたらせ

鶏頭や背筋伸ばして睥睨す

田の淵に案山子の群や鳥を見ず

本棚の塵を払ひて秋思かな

紫の黒に潜みし巨峰かな

首傾げ睨む蜻蛉とにらめっこ

かなかなのかなかなかなと

かなしけれ

登校子駆け行く風に猫じやらし